

私は、今回、「舞姫は誰のための（何のため）に書いたのか？」について考えてみた。

私が、このことについて考えてみようと思った理由は、森鷗外が何のためにこれを書いたのかと（考えた内容のとおりだが・・・）思ったのと、主人公は、豊太郎であって、森鷗外の実際に体験したわけではないのだが（実際は、それに近い体験をしたらしいが・・・）自分の汚点とも言える事を普通なら書きたくないはずのことを何故、書こうと思ったのか、気になったからである。

まず、「舞姫」のストーリーは、主人公の豊太郎がベルリンに勉強しに行き、そこで出会ったエリスに心をうばわれて、そして、相沢に助けられ、新聞記者になり、ロシアへの翻訳の仕事を経て、再び日本に帰ることになり、船の中で、そのあらましを書いているのである。

私は、この話を通して、森鷗外が、伝えなかった事は、現代の知識人に状況に流されず、自分を信じるべきである。という事だと思う。

理由は、二つある。

一つ目は、人は気が変わりやすいということです。豊太郎は、はじめ、「自分に用のない美観には心動かすまい」としているのに、エリスに出会った瞬間に、心を動かしてしまい、後に戻れない状況になってしまった。また、再び大臣に会うときも、エリスには、「大臣などにはあいたくもない、ただ古い友人に会いにいくだけ」といいつつ、エリスと別れるという約束をしてしまっている。このことから、人は気がかわりやすいことを示している。

二つ目は、人の心は、あてにならないということである。

これは、豊太郎が言うように大臣が豊太郎のことを「生きた法律」にしようとして、それが、自分の気持ちのとおりに動こうとした時、それは、邪魔になるので、大臣は、それを免官にしたり、先程も述べたように、エリスのことを裏切ったりというように、人は、自分にとって都合の良い方にむいていくということである。

これら二つは、いずれも、人が本来持っている、弱い心からくるものだと思う。弱い心を持っている人間は同じ心を持つ人間を信用しすぎてはいけないと思う。

だから、鷗外は、現代の知識人に状況に流されずに、生きていくには、他人の判断は、自分にとっては一見よさそうに見えて、自分に一番大切なことは何かという判断を鈍らせる時があるので、人（他人）を信用しすぎず、最後に物事を判断するのは自分であるべきであり、そうでないと、後悔することになるということをこの文章を書いたのだと思う。

しかし、一方で、私は、何故知識人を例に挙げたのかがわからない。これを例にしたのは、これから、学問を勉強させていこうとする家庭が増えていくだろうから、豊太郎のようなタイプの人間が増える事を恐れて、うったえているのか、それとも、たまたま、自分に似せて書いたらこうなったのかがよくわからなかった。

参考資料：広辞苑・「舞姫」森鷗外 現代語訳（by 岩本幸一）